

生誕130年記念

# 堂本印象展



「木華開耶媛(このはなさくやひめ)」1929(昭和4)年/第10回帝展/京都府立堂本印象美術館蔵

2021年2月5日(金)～3月28日(日) ※会期中無休

同時開催 第1室 新収蔵記念：辻輝子陶展 ～下賜作品を中心に～

開館時間：午前9時30分～午後5時30分(入館は午後5時まで)

入館料：一般1,000円(4枚セット券3,000円)

大学生800円/高校生500円/中学生以下無料

主催：公益財団法人岡田文化財団パラミタミュージアム

後援：中日新聞社、朝日新聞社、読売新聞社、NHK津放送局、三重テレビ放送

協力：京都府立堂本印象美術館

企画協力：株式会社アートワン

## 関連イベント 記念講演会

日時：2月21日(日) 午後2時～

演題：「堂本印象ってどんな人？」

講師：山田由希代氏(京都府立堂本印象美術館主任学芸員)

参加料：無料(要入館券) 当日受付、先着50名

生誕130年記念

# 堂本印象展

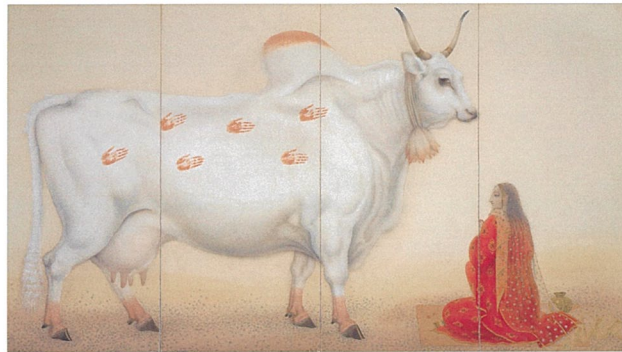
大正から昭和にかけて京都で活躍した日本画家・堂本印象(どうもといんしょう/1891~1975)は、1910(明治43)年京都市立美術工芸学校を卒業後、しばらくは西陣織の図案描きに従事し、1918(大正7)年日本画家を志して京都市立絵画専門学校に入学しました。翌1919(大正8)年、第1回帝展に初出品した「深草」が入選という華々しい画壇デビューを飾り、以降、幅広い画域で話題作を続々と発表し、一躍画壇の花形となりました。昭和に入ってから、画壇の中心作家として活躍を続ける一方で、絵画専門学校の教授として、また私塾東丘社の主宰者としても多くの後進育成にあたっています。戦後は一転して、独自の社会風俗画により日本画壇に刺激を与え、1950(昭和25)年には日本芸術院会員となり、さらに1955(昭和30)年以降は、日本画における抽象表現の世界に分け入り、その華麗な変遷は世間を驚かせました。多くの国際展にも招かれ、1961(昭和36)年には文化勲章を受章し、日本画壇に不動の地位を確立しました。

1966(昭和41)年、自作を展示する堂本美術館(現・京都府立堂本印象美術館)を自らのデザインにより設立、外壁を彩るレリーフから館内のインテリアに至るまで、自身の創意による一大モニュメントを手がけました。また、様々な技法を駆使し、あらゆる画題をこなす画才は、各地の寺社仏閣等の障壁画においても発揮され、多くの作品を残しています。

本展では帝展出品作をはじめ、初期から晩年までの代表作約70点を展覧し、その画業の変遷を辿ります。この機会に堂本印象が築いた世界をご堪能下さい。



「深草」1919(大正8)年/第1回帝展



「乳の願い」1924(大正13)年/第5回帝展



「春」1927(昭和2)年/第8回帝展



「太子降誕」1947(昭和22)年/第3回日展



「或る家族」1949(昭和24)年/第5回日展



「ロゴスの不滅」1968(昭和43)年/第11回新日展

※掲載画像作品の所蔵は、すべて京都府立堂本印象美術館です。

次回展示のお知らせ

2021.4.1(木) ▶ 5.30(日)

## 没後70年 吉田博展

明治、大正、昭和にかけて風景画の第一人者として活躍した吉田博(1876~1950)は、若き日から洋画修業を始め、幾度も海外体験を通じて東西の美術に触れながら、己の技に磨きをかけました。水彩、油彩の分野で才能を発揮していた吉田博が木版画を始めたのは49歳。西洋画の微妙な陰影を版画で表現しようという前代未聞の挑戦を始めました。没後70年の節目となる本展では、初期から晩年までの木版画を一堂に展示し、新しい木版画の創造をめざした吉田博の魅力に迫ります。

■お車をご利用の場合/○東名阪[四日市IC]より湯の山温泉方面へ約6.5km ○新名神[菟野IC]より約4km ■無料駐車場有り(普通車100台、大型バス駐車可)  
■電車をご利用の場合/近鉄[四日市駅]より近鉄湯の山線にて約25分、大羽根園駅下車、湯の山温泉方面へ300m ■全館バリアフリー、車椅子常備



公益財団法人岡田文化財団パラミタミュージアム 〒510-1245 三重県三重郡菟野町大羽根園松ヶ枝町21-6

Tel.059-391-1088 Fax.059-391-1077 E-mail office@paramitamuseum.com

https://www.paramitamuseum.com Facebook www.facebook.com/paramitamuseum Twitter @paramita\_muse

パラミタミュージアム 検索

